様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３８０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ２０８５２

研究課題名（和文）在日外国人の精神的健康とストレス対処行動に関する研究

研究課題名（英文）A study on the mental health and stress coping behavior of foreign residents in Japan

研究代表者
増田　郁美（Masuda, Ikumi）

浜松医科大学・医学部・助教

研究者番号：８０７７１６６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：ベトナム人技能実習生9名に対して半構造化面接を実施し、主観的体験に焦点を当て質的記述的分析を行った。技能実習生は、COVID-19流行以前より言語の壁、借金、若年での単身来日といった背景要因があり、さらにCOVID-19流行下では、期待していた収入が得られず不安が募ること、人との情緒的つながりの減少、ウイルス感染への恐怖、重要情報を見逃してしまう不安などから、ストレスや抑うつなどのメンタルヘルスの不調が発現していた。ただし、周囲からの適切なサポートがあれば自己効力感が高まる傾向があることが明らかとなった。彼らの来日背景やCOVID-19流行下における困難感を考慮しサポートする必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、2020年にCOVID-19感染拡大の局面に入ったため、申請時に予定していたフィールドでの調査が困難となった。そのため、その時点での在日外国人の状況を鑑み、また先行研究を振り返り、研究内容を再検討の末、ベトナム人技能実習生を対象に生活状況やメンタルヘルスの主観的体験について、質的に研究することとした。これまで技能実習生のメンタルヘルスを論じた研究は限られ、その生活実態を把握し、感染症流行前後の生活上の困難感について調査することで、今後の新たなウイルス感染症の発現等、非常時における技能実習生への社会的支援の在り方について新たな知見が得られることは、学術的・社会的意義が高いと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to identify the mental health of Vietnamese technical intern trainees during the COVID-19 pandemic. Semi-structured interviews were conducted and the results were analyzed qualitatively. Technical interns had shared background factors such as language barriers, debt, and coming to Japan alone at a young age before the COVID-19 pandemic. Furthermore, during the COVID-19 pandemic, they experienced shared anxiety because of the lack of expected income, decreased emotional connections, the fear of viral infection, and anxiety about missing important information, which led to the development of mental health problems such as stress and depression. However, technical interns tended to increase their self-efficacy with appropriate support from their surroundings. The greater understanding of their backgrounds and difficulties caused by the COVID-19 pandemic, may increase insights into how to make an appropriate supporting plan for present and future technical intern trainees.

研究分野：精神看護学

キーワード：技能実習生　在日外国人労働者　ベトナム人　質的研究　主観的体験　新型コロナウイルス感染症　COVID-19　メンタルヘルス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

在留資格別の統計において「永住者」に次いで 2 番目に多いのが「技能実習」であり、そのうちベトナム国籍者が全体の 55%（18.2 万人）を占める（法務省, 2022）。技能実習制度の目的は「技能、技術又は知識の開発途上国等への移転」（技能実習法, 2016）とされている。一方で、日本に来る技能実習生は、渡航前費用のために金貸しや銀行から借入を行っている。借金は来日前に家族が負担し、来日後に技能実習生自身が稼いだお金で返済をしていくことが一般的である。来日後は、家族を扶養するために仕送りを行い、借金の完済後は貯蓄を行う。技能実習生は、20～24 歳が 42.2%を占め（外国人技能実習機構, 2022）、およそ 20 歳代での単身生活であり、在留資格により滞在年数にも期限があるなかで、収入を得るという目的に対する心理的負荷はより大きいものとなることが予想される。また生活様式や価値観の違いから、多様なストレスに直面することが推察される。さらに、昨今の COVID-19 パンデミックは、本邦においても国民に対する外出自粛・行動制限を行うなど、人々の生活や経済活動に大きな影響を与え、日本で暮らす在日外国人も、日本人同様に外出自粛生活を強いられた。このような現状にありながら、これまで在日外国人労働者や技能実習生のメンタルヘルスを論じた研究は限られ、特に大規模感染症流行時における彼らのメンタルヘルスについて着目した調査は存在しない。

２．研究の目的

本研究の申請時における当初の研究目的は、①在日外国人が抱える精神的健康に関する問題とその要因、およびストレス対処行動について調査し、その特徴や傾向について明らかにすること、②在日外国人の精神的健康とストレス対処行動についての考察から、日本の地域社会で生活を営む在日外国人へのメンタルヘルス教育及び健康指導等の在り方を提示することである。

３．研究の方法

（１）研究デザイン

申請当初予期していなかった COVID-19 感染拡大により研究方法等を変更した。「COVID-19 流行下における日本語初学者のベトナム人技能実習生の生活状況に影響を及ぼす自身のメンタルヘルスについての主観的体験」を明らかにするため、質的記述的研究とした。今後の COVID-19 の再拡大時や新たなウイルス感染症のアウトブレイク時における技能実習生に対する社会的支援の在り方について示唆が得られることが考えられる。

（２）研究対象者

日本語能力試験 N4 程度またはそれに満たないベトナム人技能実習生。技能実習生の派遣元となる静岡県 A 市に所在する監理団体より対象となる技能実習を紹介していただき、その後スノーボールサンプリングにて対象者を決定した。本研究では N4 に達している対象者はいなかった。

（３）データ収集期間・収集方法

2020 年 11 月～2021 年 3 月に、半構造化面接を行った。インタビューでは COVID-19 流行時の、① 気持ちの変化、② 精神的不調、③生活上の困難さ、④周囲のサポート、⑤仕事の状況の変化について質問した。ベトナムのダナン大学外国語大学日本語学部の研究者（以下、共同研究者）が、日本人研究者（以下、研究者）と対象者の質疑応答を通訳した。①予備面接の実施、②通訳が共同研究者として通訳することを認識し、研究の目的などにも精通すること、③通訳する場合は価値判断を含まずにありのままを伝え、共同研究者の解釈がインタビューに影響しないようにすること、④インタビュー後に振り返り、改善点を議論することに留意し実施した。インタビューの実施環境は、対象者と研究者はプライバシーを確保できる A 大学の個室を利用した。共同研究者はダナン大学外国語大学内等からオンラインで参加した。インタビューは対象者の許可を得て録音した。

（４）分析方法

インタビュー内容をベトナム語で記録し共同研究者が日本語に翻訳した後、研究者が分析を行った。分析過程として、具体例を抽出し、その意味を解釈し定義を作成した。定義に照らしてデータ中の具体例を探し、類似性を確認、場合によっては定義を修正した。さらに、類似性、対極性との観点から比較検討し、概念を作成した。最後に、関係性を見ながら類似する概念をまとめ、抽象度を高めながらカテゴリを生成し、相互関係と時系列的な流れを考慮し結果をまとめた。

（５）データの信用性および分析の確実性の確保

妥当性は、生データと概念を研究者間で見直しや修正を行い合意した。また 3 名の研究参加者にメンバーチェックを行い、分析結果がベトナム人技能実習生の考えを適切に反映しているか確認し 3 人から同意を得た。信頼性は、実際に在日ベトナム人を招き予備面接を行い、面接技術の精錬のためのトレーニングを重ねた。通訳・翻訳時は共同研究者の解釈を含めないことを共通認識した。分析は質的研究の専門家からのスーパーバイズを受け、何度も協議を重ねた。

（６）倫理的配慮

対象者に研究の主旨や方法、参加は自由意思でありいつでも中止できること、公表したくない事項は使用しないこと、参加拒否による不利益は生じないこと、個人情報の取り扱いには十分配慮し、研究目的以外には使用しないことについて説明し、文書にて同意を得た。本研究は浜松医科大学臨床研究倫理委員会の承認（研究番号 20-164）を得て実施した。

４．研究成果

（１）結果

9 名のインタビューを分析した結果、9 カテゴリ（以下【】）、27 サブカテゴリ（以下<>）が抽出された。メンタルヘルスの経時的変化として、流行以前より存在する「言葉の壁」という背景要因に COVID-19 の影響が加わることにより、ストレスや抑うつなどメンタルヘルス不調が発現し負担が深刻化していた。ただし周囲からの適切なサポートがあれば、自己効力感が高まる傾向があった。

【言葉の壁があることで、日本人との心理的隔たりが埋まらない】対象者は言葉の壁が仕事や日常生活に影響し、日本人との間に心理的距離が生じていた。技能実習生の日本語能力は、渡航前後に研修はあるものの、殆どが初学者である。そのため、仕事において＜日本語の作業指示が理解できず、嫌な態度をとられることに苦痛を感じる＞ことや、地域生活において＜日本語に自信がなく、地域住民と交流したいが自分から話しかける勇気がもてない＞ことを経験していた。

【期待していた収入が得られず、不安が募る】COVID-19 感染拡大により勤務時間が短縮されたり残業がなくなることで、＜収入が減り、借金返済と貯蓄が計画通りすすまず焦りが生まれる＞ため不安が募っていた。さらに、＜収入の減少による仕送りや借金返済へのストレスから食事や睡眠がとれない＞状態となり、食欲低下や入眠困難といった抑うつもみられた。そのような状況の中でも、家族への経済的支援を継続するために＜借金返済と貯蓄の為に生活費をきりつめる＞ことで、節約し出費を抑えていた。収入への不安は、全ての対象者から表出されていた。

【日本語が理解できず、重要情報を見逃してしまう不安が高まる】＜周囲の日本人が COVID-19 関連の重要情報を教えてくれても言葉がわからず困る＞ことや、＜SNS などのメディアによる発症者数に関する誤情報により心配が募り、困惑する＞ことにより重要情報をタイムリーに取得できない不安を感じていた。また、スマートフォンは所有しても経済的理由により SIM カードは所持しないことが多く、電話回線経由の音声通話やインターネット、SMS 機能は使用できない。Wi-Fi スポットのみ通信可能となり、＜Wi-Fi 通信環境に依存した連絡手段に限られることにより、通信圏外での緊急時には近くの人に助けを求めざるをえない＞不安を抱いていた。

【人や文化との情緒的つながりや出会いが減り、心が満たされなくなる】社会的距離の確保が求められ、人とのつながりが減ることで孤独感が募ったり、楽しみにしていた日本の文化を体験する機会がないことに落胆し、心が満たされなくなっていた。対象者は、親しい友人に会うことや、気分転換のための外出を自粛したが、それにより＜不安、孤独感を解消できないまま生じるネガティブな感情をコントロールできない＞状況であり、心理的反応として、イライラ、流涙、友人に対する短絡的な感情的発言として表出されていた。また企業の業務量減少による、長期連休の延長、休日の増加により、余暇時間が増えたにもかかわらず、外出自粛や支出を節約のために、以前のように資金を捻出して国内の小旅行や日本文化体験といった楽しみを行うことがなく、＜外出自粛により楽しみにしていた日本文化の体験ができず寂しく思う＞ことを体験していた。

【ウイルス感染した場合に起こりえる身体的問題とその解決方法が見通せない】感染拡大が予測できず＜自分が感染してしまうことに対する不安＞があり、万が一感染した場合、日本語で関係機関への連絡・手続きをしなければならない不安、医療機関にて日本語で症状を説明しなければならない不安、休職・帰国させられる心配、治療費用への懸念、感染後の対応方法の流れがわからないことなど、＜感染した場合どう対処してよいかわからない＞様々な懸念があった。

【不安定な状況のなかでも自分は守られている安心感が高まる】対象者は＜監理団体に母国語で生活全般について相談ができ心強い＞＜地域住民や政府からの物資の支援があり嬉しい＞＜企業や監理団体から、COVID-19 関連および生活に関する情報的・情緒的サポートがあり心強い＞＜日本人が自分たちに関心を持って暖かく接してくれて嬉しい＞ことを体験していた。また、守られている安心感のもと、＜問題に応じた適切な相談先をもつことで、困難を乗り越えられる＞感覚を得ていた。

【家族が自分の精神的な支えになっていることを感じる】技能実習生は、Facebook などの＜SNS を介して家族と連絡をとることで安心できる＞ことを経験し、離れた家族と時間を共有することで、日本の生活で受ける精神的ストレスを回復する力が高まっていた。また＜家族に仕送りができない状況であっても、励ましてくれることへの感謝＞を示し、＜家族が COVID-19 流行下での国外単身生活での感染を心配してくれる＞ことで、精神的に支えられていると感じていた。

【COVID-19 流行下での日本の生活への適応が進み、自ら乗り越える気持ちが芽生える】周囲のサポートにより安心できる環境下で過ごしていくことで、対象者は＜COVID-19 流行下でも日本での生活に慣れることで自分本来の力を発揮でき、楽しいと感じるようになる＞ことを経験し、サポートを受け生活へ適応が進むと、自分でも乗り越えようとする気持ちが現れていた。また、勤務時間短縮により収入が減る不安は強いものの、＜勤務時間短縮により同僚とのコミュニケーションの機会が増え、気持ちに余裕ができる＞こと、＜日本人の感染対策への意識と日本の医療に対する安心感が高まる＞ことを経験していた。そして、＜家族や友人を心配させたくないため、困難は自分で解決できるよう対処行動をとる＞ことを自ら努力していた。対処行動として＜SNS を駆使し、COVID-19 関連の正確な情報を得るため工夫を重ね＞ていたが、公的な機関や信頼できる媒体の情報のうち、ローカルな情報については、ほぼ日本語による掲載となるため読解

に困難感を抱いていた。

【家族を経済的に支える責任感が高まる】家族からの励ましを嬉しく思う反面、＜家族への仕送りが減ることで、家族を養えず悲しい＞という思いが高まり、経済面での目標や家族の期待に応えられないことへの悲しみや焦りを乗り越え、家族を支える責任感が高まっていた。一方で、＜家族の大黒柱として支えるために、つらくても気丈に振る舞う気持ちが高まる＞ことで、家族に心配をかけないように、辛いことがあっても前向きでいようとする気丈な気持ちが存在した。

（2）考察

① 職場での日本人との心理的隔たりによる地域生活への影響

在日外国籍者の感じる「言葉の壁」（中嶋ら, 2015）に加え、新たな知見として【言葉の壁があることで、日本人との心理的隔たりが埋まらない】ことがあった。日本語については就労前の研修では基礎にとどまり、就労先で働きながら覚えざるを得ない。そのため日本語の指示がわからず的確に動けないこと、それに対する従業員の厳しい言動により日本人との間に心理的距離を感じたと考えられる。それにより地域生活においても周囲の日本人に話しかける勇気が持てず、消極的・内向的となる傾向がみられた。そのため技能実習生は、日本人との意思疎通や感情の共有が非常に難しい状況からストレスを感じやすく、解決の手段も乏しいことが考えられる。

② 言語化されにくい経済的不安によるメンタルヘルスへの影響

景気低迷を受け、本来の目的である【期待していた収入が得られず不安が募る】ことは深刻であり、食欲低下、入眠困難など身体症状もみられた。これまで外国人労働者は、労働環境とコミュニケーションのストレスを抱えていることが示されている（李, 2012）。本研究はこれに加えて「収入を得て家族を扶養するという来日目的を果たせない」ことは、メンタルヘルス悪化の大きな要因であることがわかった。一方で、ほぼ全員が個人的な問題を他者に相談していなかった。ベトナム人のもつ特性として、メンタルヘルスの問題を頭痛、寒気など身体症状として表すことが多く、重篤な状態になるまで専門家に相談しないことがある（鵜川, 2010）。さらに、お金や借金に話は、周囲に相談しにくく、表出されにくい問題である。看護職は診察や職場の健診において、技能実習生の生活背景を理解した上で、言語化されにくいメンタルヘルスの不調の兆候を見逃さないことが求められる。またサポートを検討する場合には、計画通り収入を得て家族を扶養していくことは、技能実習生に共通する懸念である、という背景を理解することや、文化によりメンタルヘルスの捉え方や症状の表現、相談方法に差異があることに留意する必要がある。

③ COVID-19 流行下における困難な体験（②以外に明らかになった 3 つの知見）

第一に、情報の取得に関する問題である。COVID-19 流行以前から存在した【言葉の壁があることで、日本人との心理的隔たりが埋まらない】状況が切迫化し、流行下では【日本語が理解できず、重要情報を見逃してしまう不安が高ま】っていた。疾病の流行や重症度が急速に高まっている危機的状況においては、情報の役割は非常に重要であるが、発信されている情報は殆どが日本語である。MERS 流行時も、外国人は言語的問題から適切かつタイムリーな対応を可能にするための情報が欠如した（Park et al., 2016）が、今回も同様の結果であった。2012 年の MERS 発生から約 10 年が経過し情報技術の進歩がある中、多くの自治体のホームページでは日常生活に関する情報については、多言語での閲覧が可能である。一方で、COVID-19 の流行と同時に生活に欠かせなくなった、感染者数の速報値や感染拡大に関する注意喚起などタイムリーで重要な情報は、殆どが日本語に留まる。これらを多言語配信するには人員や技術面から容易ではないと予想するが、今後のパンデミックや大規模災害に備えて検討すべき課題である。その他に物理的問題として、情報にアクセスできる媒体が限られ＜Wi-Fi 通信環境に依存した連絡手段に限られることにより、通信圏外での緊急時には近くの人に助けを求めざるをえない＞状況に不安を抱いていた。技能実習生は、経済的理由から携帯電話の SIM カードを所有しない者が多い。無料 Wi-Fi スポットが限られる日本では、＜日本語に自信がなく、地域住民と交流したいが自分から話しかける勇気がもてない＞技能実習生が、外出先で見ず知らずの人に自ら声をかけ、自身の要求を説明することは相当な勇気がいると思われる。これは地震などの大規模自然災害時においても重要な課題であり、外出時の情報アクセスに関する改善が求められる。さらに Park らによれば、MERS 流行下では外国人居住者が信頼できる情報にアクセスできないことにより、病気の深刻さについての認識が欠如しただけでなく、個人レベルで健康問題に対応するための努力が殆どなされなかったことが明らかとなっている。一方で本研究の対象者からは、COVID-19 情報が不足することで感染予防等への認識が薄れることへの言及はなかった。反対に、感染症に対する知識や正確な情報の不足から過剰な脅威を招いていた。この理由として、エピデミックとして中東地域で広く発生した MERS と異なり、パンデミックである COVID-19 の流行は世界的な大流行であり、対象者は母国からも感染情報を取り入れ、それを認知しつつ、異国の地での感染に漠然と脅威を感じ、信頼できる情報にアクセスできないことで、過剰な混乱を招いていたと考えられる。つまり母国から感染症の脅威を聞きつつ、日本国内および居住地域の情報がない状況から、過剰に恐怖を抱きやすいことがわかった。今後、大規模感染症が発生した際、言葉の理解できない外国人居住者にとっては、その流行パターン、感染力についての情報量、自分への影響度によって、個々のもつ恐怖、感染予防への認識や努力に差異がみられることが示唆された。

以上のように、対象者は言葉の問題や情報アクセスへの問題から、とりわけ居住地域におけるタイムリーでローカルな情報へのアクセスおよび内容理解が難しい状況が示され、情報の欠如により過剰に脅威を抱きやすいことが明らかとなった。

第二の知見は、従前からの背景要因である【言葉の壁があることで、日本人との心理的隔たりが埋まらない】技能実習生は、外出自粛によりさらに【人や文化との情緒的つながりや出会いが

減り、心が満たされなくなる】状況にあった。感染症流行前の彼らは、休日には友人と市街地や小旅行に出かけたり、近所の友人宅に集まり懇談するなど、それぞれの方法で気分転換をはかっていた。しかし流行以降は、収束が見通せない中、外出を自粛している。落合が指摘するように、技能実習生は 3 年単位で入れ替わるそれぞれが断絶した存在であり、エスニックな連帯や横の結びつきが希薄であるため、自分たちのコミュニティを築く兆しはない（落合, 2010）。つまり、日本人とは異なり地域住民との関係性を築きにくいばかりか、定住化し民族コミュニティを築いている他の在日外国人や日系人とも異なる立場にある。流行以前は機能していた同郷者個人間の領域によるセルフサポートも流行下には機能しにくく、社会とのつながりや個人間で助けを求める方法をとることは困難である。そのため日本人以上に孤立、社会からの距離を体験しやすく、生活上、職場上の困難を容易に吐露できる環境が身近に存在しない状況が考えられる。これにより周囲との感情共有が難しくなり、一層ストレスを感じることが推測される。また＜不安、孤独感を解消できないまま生じるネガティブな感情をコントロールでき＞ないことによりイライラ、流涙、短絡的な感情的発言がみられたが、これは対象者が周囲との感情共有や情緒的つながりが難しく、心が満たされない状態から表出されていた可能性がある。以上のように、COVID-19 流行下では、複雑なストレス要因を解消する手段を限定され、通常の対処行動がとれないことで心が満たされず、技能実習生は情緒的つながりが減り、心が満たされなくなる状況に置かれることが示唆された。特に周囲と情緒的･心理的つながりを感じられるような方策が必要である。

第三の知見は、対象者は単なる感染による身体的衰弱への脅威だけでなく、＜感染した場合どう対処してよいかわからない＞といった様々な懸念が存在していた。例えば、感染による帰国、または長期の休職を強いられ収入が無くなること、さらに医療機関への受診時に言葉の問題が伴うことから恐怖心が助長されていた。このように、ウイルス感染への恐怖の背景は、経済的問題・言語的理由など様々な事柄が関連していた。対象者はそれらを懸念するあまり、自身に感染兆候がみられても受診を敬遠することも考えられ、症状の重症化や、集団感染リスクが危惧される。感染時に起こる身体的問題と懸念事項への解決を見通せる情報提供が必要であると考える。

④技能実習生への周囲のサポートによる安心感の醸成

対象者は多様なストレスを体験していたが【不安定な状況のなかでも自分は守られている安心感が高まる】ことで、心強さや嬉しさというポジティブな感情が喚起されていた。主な効果的サポートは、適切な相談先をもつこと、母国語での相談が可能なこと、地域住民や政府からの物資的サポート、企業や監理団体からの COVID-19 および生活に関する情報提供や情緒的サポート、日本人からの関心や暖かい言葉かけがあることであった。これまでに在留外国人へのソーシャルサポートは抑うつを緩和する（深谷, 2002）ことが明らかとなっているが、これらのサポートを受けて、対象者にポジティブな感情が喚起されたことから、効果的なサポートはストレスの軽減や安心感の醸成に寄与することが本研究においても示唆された。不可抗力である感染症による借金や仕送りなどの経済的問題は、自助・公助の努力では解消されにくい。しかし一市民として、医療職として、技能実習生が抱く“ 不安感 ”に対してのアプローチは可能である。また＜日本人が自分たちに関心を持って暖かく接してくれて嬉しい＞気持ちが高まるように、一市民として地域社会との距離を縮めるような声掛けなど、効果的サポートが得られるよう取り組むことが必要であり、医療職としてはポジティブな感情変化を見逃さず、その気持ちを共有することも、対象者に関心を示しながら、情緒的サポートを実践する上で大切であると考える。

⑤技能実習生自身の自己効力感の芽生え

技能実習生は周囲のサポートを受け【COVID-19 流行下でも日本での生活に慣れることで自分本来の力を発揮でき、楽しいと感じるようにな】っていた。収入減少への焦り、感染への恐怖、情報取得への困難感は残るものの、企業や監理団体から情報的・情緒的サポートや、日本人が自分たちに関心を持ち暖かく接してくれて嬉しいなど、状況を肯定的に捉える心理的変化がみられ、自ら困難は自分で解決できるよう対処行動をとったり、COVID-19 関連の正確な情報を得るため工夫を重ねることで＜自分本来の力を発揮でき、日本の生活を楽しいと感じる＞ようになっていた。特に SNS は有効であった。2002 年 SARS 流行時はマスメディアが情報源であり、個人が必要とするタイムリーで詳細な情報の入手が困難であった（Jiang et al., 2009）が、昨今の COVID-19 流行下では SNS が情報源として活用され、情報アクセスが容易となった。誤情報やフェイクニュースの問題はあるものの、＜SNS を駆使し、COVID-19 関連の正確な情報を得るため工夫を重ね＞られるよう、周囲もその活用方法について支援していくことにより、困難な状況を乗り越える手段として非常に有効な結果をもたらすと考える。また、SNS を連絡手段として使用することは、母国の家族とのつながりを強く感じられる方法でもあった。ビデオ通話の活用により相手の表情を視覚的に確認できることは、伝えたい情報だけでなく互いの感情の共有に有効であり、このことが SARS 流行時には主流であった国際電話等の顔の見えない音声通話とは異なり、異国で暮らす対象者の精神的な支えとなっていたと考えられる。今後は言葉の壁を躊躇することなく気持ちを表出できるよう SNS を有効活用したコミュニケーション機会の構築など、技能実習生が使いやすい SNS アプリケーションの開発や活用支援が有効であると考える。また、SNS による情報は、母語、平仮名表記、翻訳されることを考慮した平易な日本語での掲載を考慮する必要がある。

（３）本研究の限界

優良な監理団体に所属する技能実習生が大半を占めており、より困難を極めた事例の特徴は把握できていない。また対象が製造業、建設業に偏り、他業界における体験はさらなる検討が必要である。さらに通訳・翻訳においては研究者がベトナム語に堪能でなく、本研究の限界である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 増田郁美
２．発表標題 ベトナム人技能実習生のCOVID-19流行下における生活状況に影響を及ぼす自身のメンタルヘルスに関する主観的体験（Vietnamese technical intern trainees’ subjective experiences of their own mental health as influenced by their living conditions during the COVID-19 pandemic)
３．学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	チャン　ゴ　ニャ　チャン (TRAN NGO NHA TRANG)		
研究協力者	岡本　典子 (OKAMOTO MICHIKO)		
研究協力者	木戸　芳史 (KIDO YOSHIFUMI) (70610319)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

ベトナム	ダナン大学			